



## 植物愛と人情のずれ

林 常 夫

磯馴(そなれ)松、懸崖松、見越の松など、古来わが国民に好かれる風雅な松の姿は、その実は風の強い島国、日本で、常時吹きすさむ季節常風に日夜さいなまれて

しかも松の立地環境適応性(アダプタビリティ)で耐えぬいた「忍苦の姿態」である。

わが国の風佳観人情では、それを生花、盆栽、造園技術上にもで発展させ、天地人、大中小と不等辺三角形観を基調とし、絵画、舞踊などの芸術上まで、非シンメトリ基調がにじみ出ているような気さえずる。だが、生きている自然植物魂と人情とは、ここに「ずれ」がはじまるのである。まず実例を援用しよう。

### (一) 女夫(みょうと) 松観の

#### ずれちがい

関の五本松は見えていないが、昔から自然に寄り添うて育つ大小双幹の松を女夫松と呼び、雄松は大幹が亭々としてそびえ、雌

松はほっそりと寄り添うて育つ風情に、女夫情趣を感ずるのは古来の民情である。

だが、事実はまったくの無情で、本能だけの植物社会では、実はとんでもないことである。当初は大地に二粒の種子が並んで根をおろすと、早速時とともにその根が双方から地中で勢力を張りあい、水分なり養分なりの独占競争がはじまり、本能のみの植物の社会相はただ深刻そのものである。結局において近接する二本分の根は、肥大勢の結果、地中で自然癒着(ゆちゃく)合体する。場合によっては、双幹の根元が合体して一株二本立ち、真の夫婦松ができて、「骨がなかったら一つになりたい」など人間の睦言そのままの形となる。

「ああそれなのに」事実は大幹の夫松君は、抱いている女松の根から吸いあげる養液の大部分を搾取横領してますます肥大し、女松のほうにはほんのお残り養分をもらって、細々なよなよと育っているのでは

る。この人情ずれ話が、この自然保護誌に本稿を書くわが志向である。

### (二) 草木は地球上、それぞれの郷土にのみよく栄える

南洋にはヤシ、九州にはクスノキ、北海道にはエゾマツなどと、地球上それぞれ独自の気候風土に適応した草木種であることは誰でも知っているが、毎年、北海道のリリーの根つきの花株を九州に贈る人はたくさんあるようだ。これは特別に品種改良をやらねば無理である。現にこの筆者が老友に頼まれて、神戸六甲山の別荘に本道の白樺寄贈を無理したが、間もなくハンノキのような青ハダに変化し「樹種まちがい」の苦情を食ったことがある。

しかしこれと似た話、それは一昨年、各府県の代表木が公選されると、これらを東京皇居外に全国産木寄せ植への公行事がすらすらと成り立ちしたが、これにも無理が包蔵

される。もつとも筆者は、大正初め頃明治神宮神園創作の際に、全国からの献木行事に北海道からも参加したから、今日は東京地方適木のみが栄えていよう。本道産のナカマドの紅葉美も、東京に移すと一般紅葉季前に廣葉(わくらば)となる。

同一樹種でも、温暖多雨、肥沃な産地、吉野杉苗を秋田に移し植えると、最初の十数年間は「金持ちの若様」のような吉野杉は、ならべて植えた秋田の田舎杉苗よりはるかに成長が迅速であるが、その後は後者がグングン伸び勝つと聞く。理由は、寒冷苛酷な秋田風土に育つためには秋田杉は、はじめのうちにはせつせと地下に根を拡大強化する、目に見えぬ努力をしており、結局の勝利を期しているので「まずその根底を養う」という修身の講話を実行しているらしい。世間では「東北青年は鈍重だ」との評も聞くが、寒帯地方では、人も草木も同傾向の特色を持ち、それが本来の特質長所

でもあり、本道の産業開拓には重大な着眼点であると思う。

とくに高山植物を気軽に抜き採り、持ち帰って鉢植えになどと思う素人の所作は、立地環境、技術を無視したはなはだ幼稚で悪い出来心である。

### (三) 日本人本来の高山植物観

欧州内陸人の祖先は遊牧、狩猟の民族で林業、牧畜、酪農、獣肉食、同毛衣の民風を伝承しているといわれるが、わが日本民族は農業による穀菜、繊維衣と水産業による魚肉食、日本建築用のスギ、ヒノキ、松の林業で身をたてる伝承を持つ。だから島国型の中央の高峻な脊梁山脈地帯と、その自然林には縁遠く、この境地はむしろ宗教的に考え、天孫降臨とも結びつけて、高山岳森林は神の領域を思い、登山には六根清浄を唱念し、著名山岳の麓には山にちなんだ社寺を建立し、山頂には必ず何様かの石の祠が祭ってあった。

しかしこのつぎが大切で、山頂の高山植物地域は「お花畑」とよび、神のお庭になぞらえた。昔の光明皇后の御歌に「折りたらば手ぶさにける立てながら、三世の仏に花たてまつる」とあるのが、花の在場は違っても等しく大和民俗の自然愛護の心根である。

以上はもとより古い民風で、今日これを持ち出すのはもちろん無理ではあるが、高山の自然愛護は世界的な基本公徳となつていにもかかわらず、近代わが国の登山者達は、まったく反動破滅的に山を荒すような傾向が強過ぎるのである。

筆者は明治四十一年に道任官以来、大正六年まで十年間、山林植伐計画立案技師で、毎年夏廻り半歳ずつ大雪山を中心に、累計百五十万六千町歩の原始林を周到に踏査した特殊の履歴を持つ。だから現在の大雪山、阿寒の二大国立公園の素地中、大雪山層雲峡以奥の国有林約四万町歩は交通不便でもあり、一括して明治四十二年に利用林外(禁伐地区)に編入したのをはじめとして、十勝各河川水源地、著名大湖畔の風致関係原始林地帯は禁伐、制限採伐などあらかじめ風致保持の施業計画をたててあったので、昭和七年国立公園正式編入の際には、昔から編入準備ができていたのであつたし、かつ、どこも交通不便なこととして、このときまでは何らの被害もなかったのである。

しかるに一度国立公園になると、登山者がふえる。学者達も珍奇な動植物を発見する。登山者は競うてそれを採取する。ちょうど夏休みの終わり頃、子供達のする昆虫採集と同じ型で荒らされはじめた。国有林

だから、国費の監視人を特設して取締りを励行した——この励行が過ぎて、北大の植物の神様のような官部老博士の研究資料まで見とがめ「大学の先生であろうが、何様でも、道法はお守りなさい。もとのところに植えもどせ」といった、わが親愛なる山番のために、筆者は大学に釈明に行った笑話さえある——終戦後は一層ひどいとは思ふが、国民の常識教育に期待するほかはない。

### (四) 人情は草木の根を忘れがち

樹木でいうと、根部で奪い合つて吸いあげる水養液は幹材の白材(しらた)部を登つて枝から葉へ行き、ここで消化した養液は樹皮下を降つて年輪をつくり、肥大成長をするのであるが、地下根部の水養液の掠奪とまた梢頭で日光を独占したいと争う欲望とは、本能のみの争いだから実に残酷をきわめている。だが人情のほうは地上に現われる翠色、紅葉、樹姿、四季折々の風情に惚れこむが、その根のほうはほとんど忘れ去られているのが普通であるのは非常識である。

しかしまた、樹木の中にはイチイ(オンコ)のように、競うて伸びる木々の日陰にしんぼう強く忍耐して、絲巾のような小巾の年輪を形成して、千年以上も長生きし

て上木の衰退変化を待つのもあるが、またカシワのように直根、横根を頑強に地下に張りめぐらし、地上が伐られようが焼かれようが、根は生き残り株から萌芽して、下手なセメント舗装くらいはつき破る活力を持つのもある。

そんな頑強なカシワでも、地下の根を道路工事で切断しおわれれば、たとえ根元には小柵を結び「お声がかりのカシワ」と銘木標札は建てても、老木を永く支えるには根不足である。

また、いま一つ札幌市の北一条通りに、骸骨のようなコブだらけの老アカシヤ並木がある。あれは往年は駅前通りとともに、札幌アカシヤ街と賞讃されたものだが、最早や根が発育できず、かつ老い過ぎて風致並木としては不適格になっている。しかるに伝聞すると、この老衰木に花を咲かすとスタミナを浪費して、樹命を縮めるという性衛生の思いやりで、毎春に翌春のために用意する花芽枝を毎秋に剪除するから、花も咲かぬ代りに骸骨化するのである。

ここに働いている人情のズレと思うのは街路樹はどこまでもその姿勢、緑葉、花などを賞する装飾木であるから、市内の不適木は随時植えかえて、常時麗わしくするのが文化的定法である。だから、公園その他で巨樹、銘木としてその長寿を保護する木

とこれとを混同してはいけない。もっともパリのマロニエ木の名物になると、不便を忍んで道路のほうを曲げて、昔の名木並木を保存する例はある。しかし日光名物の杉並木は枯れつつあり、札幌の名木・チャチャニレは路傍で悶死したが。

#### (四) 愛樹の常識を充実せよ

市内の装飾、風致木として、まるで山出しの丸太樺みたいな不風流な木を植えるから、市民に軽べつされ、馬をつながれ、折られたりするのである。元来、庭園樹その他装飾樹は、他処で予備養成をして最初から佳姿の樹を設計に則して植え、洋庭では樹下を芝生にして、歩道はその中を迂回するし、日本庭園では歩道の代わりに、飛石を並べて歩かせ、決して植木の根元を踏み固めないようにするのが定法である。

愛樹の基本はまずその根を自由に伸ばさしてやることであり、市内植樹には第一にこの欠点がある。筆者は永年学校植樹にも関与したが、二、三m以上の樹には支柱が不完全で、かつ植後の日々の給水が忘れがちであり、そのうえ遊戯場の都合で根部がふみ固められるので、失敗している。

米国には一つの市を総括して、植えつ

け、手入れ一切の業務を忠実、格安に受持つ会社があるが、わが国でも公社的の組織で専門家をじゅうぶん活用することを考えたいものである。また、周囲手近な国公有林当局も、主林木外のモミジ、ナナカマド、ライラックなどの灌木、亜喬木などは気軽に分譲あれかしと希う。

道庁正門前のイチヨウ並木は元の土木技監役の名井博士が、五十年前、東京地方土木出張所からその養成並木をとり寄せていまの名木並木となっているが、つぎの拓殖新百年間にはさらに成育して「公孫樹トンネル」という札幌新名物となるであらう。

本道では昔買物をするとき、売子が「お客さん、これは内地産ですよ」と、舶来品にはおよびもないが暗に、自分で道産品を卑下するクセがあった。旧道庁庁舎はりっぱに復旧保存されるが、その公庭には道産名木の景趣がきわめて稀薄である。希わくは「まず、道庭よりはじめよ」と進言する。後年ここにポプラが植えられると、「右えならえッ」で、全道支庁庭に一斉にポプラが生え広がった先例もあるから。

(林業会館理事専長)